□調布市武者小路実篤記念館・日本近代文学講座

「絵画の約束」論争を読み解く

松本和也（神奈川大学）

【1】講座の概要

高村光太郎が開いた、日本初の洋画画廊「琅玕洞（ろうかんどう）」で開催された「山脇信徳氏作品展覧会」（一九一一年四～五月）は、木下杢太郎の批評を皮切りに、山脇本人の反論のほか、有島壬生馬、武者小路実篤、柳宗悦らの発言も招き寄せ、美術・文学をまたぐ論争となっていきました。今回は、この「絵画の約束」論争に注目して、それぞれの論者が表明していった芸術観やその背景を掘り下げてみたいと思います。

【2】山脇信徳（やまわき・しんとく　一八八六～一九五二／洋画家）

［出生地］高知県［学歴］東京美術学校（現・東京芸術大学）西洋画科［明治四三年］卒

早くから印象派に傾倒。明治四〇年第一回文展に入選、四二年第三回文展で「停車場の朝」が三等賞となり、画壇の注目を浴びる。四五年滋賀県の膳所中学教師、大正一一年満州へ渡り奉天中学教師。一二～一五年春陽会会員。一四年渡欧、昭和二年国画創作協会洋画部会員となり、国画会に作品を送る。三年帰国、晩年は高知で暮した。二〇年高知洋画協会を創立。「白樺」同人で、木下杢太郎との「絵画の約束」論争が有名。志賀直哉、舟木重雄と親しかった。　［受賞］文展三等賞（第三回）［明治四二年］「停車場の朝」、院展樗牛賞「湖畔の冬」、高知県文化賞［昭和二六年］

（『美術家人名事典　古今・日本の物故画家三五〇〇人』日外アソシエーツ、平21）

【3】「絵画の約束」論争の経緯

①木下杢太郎「画界近事　六　山脇信徳作品展覧会」（『中央公論』明44・6）
②山脇信徳「断片」（『白樺』明44・9）
③木下杢太郎「山脇信徳君に答ふ」（『白樺』明44・11）
④武者小路実篤「六号雑感　自己の為の芸術」（『白樺』明44・11）＊＝六号記事
⑤木下杢太郎「無車に与ふ」（『白樺』明44・12）
⑥武者小路実篤「杢太郎君に」（『白樺』明44・12）
⑦山脇信徳「木下杢太郎君に」（『白樺』明44・12）
⑧武者小路実篤「杢太郎君に（再び）」（『白樺』明45・1）＊
⑨木下杢太郎「後返事二通」（『白樺』明45・1）＊
⑩木下杢太郎「公衆と予と」（『白樺』明45・2）
⑪武者小路実篤「杢太郎君に（三度び）」（『白樺』明45・2）
⑫武者小路実篤「『自己の為』及び其他について　「公衆と予と」を見て杢太郎君に」（『白樺』明45・2）
⑬山脇信徳「木下杢太郎君に」（『白樺』明45・2）＊

斷片

山脇信徳

寫實の追求は物象の崩壞を來し、崩壞は動搖となり、錯亂となつて、畫家は次第に時間の觀念に囚はれ、繪畫は益々瞬間的のものとなる。

私はこの瞬間的氣分を飽迄追求して、何處までも物象の形體をリズムによつて破壞せんと努めた。（もとより意識的に努めたばかしてなく私の理智と官能が內面的に崩れて來たから）そして最後に無形畫の境に入つて縹渺たる象徵的氣分に生きんとあせつた。

處が、僅に其努力の初步に於て、早くも私の畫は不變に轉じた。

それは私が分解と破壞を追求すればする程、不思議にも私の畫は反對の方向をとつて綜合と固定に逆戻りを爲始めた。

實際これは私にとつて思ひがけない結果であつた。

刹那は永遠に轉じ、動搖は靜止に戻り、多變は不變に移り、抽象は具體に返り、時間は空間となり、分

解は綜合となつて私の苛々した氣分は何處となく靜かな大きな心持ちになつて來た。

私は色彩の分裂を平面に伸べ、光の波動を線條に約した。そして繪畫のエッセンス——タイムとスペースを合せたるデコレーションが生れた。

私は始めてポスト、インプレッショニストの畫は單純なプリミチーヴのものでないことを知つた。もしあれを邪道といひ、墮落と呼ぶならば、先づ繪畫其物の追求と推移を否定しなければならん。

天才は自己の形式を味ひ盡して餘瀝を遺さない。自然の客觀的眞の描寫は所謂前期印象派の人々に盡さてゐる。其後の畫家が內面的に崩れて行くのは自然の勢である。

マネーはあまりに繪畫であり、モネーはあまりに客觀であり。ピサロは形式に偏し、シスレーは悧巧に過ぎる。何れも空虛である。

私はもつと〳〵神經と、多變と、理智と、力を要求する。

眞の壓迫は恍惚より脫して苦痛に移る、苦痛は再轉して沈默に歸る。私にとつて繪畫は最早單純なる快樂ではない。時に一瞬の存在を爭ひ、時に永遠の實在を暗示する。私は始めて生きた心地がした。

畫家が最も自己の存在を意識するのは描きつゝある時である。描き上げた時、もう其畫は畫家にとつて極めて緣が遠い。畫家は既に新たなる自己であるから。

ウキスラアの畫をエルレインやボーの詩に較べる人があるが、それは表面の形式丈けの話で、彼の畫には此等詩人の內面が動いてゐないから其流動は何時も一本調子で流動其物に多樣の變化がない。其線畫は徒らに甘く其スケッチは一定の氣分を常に色紙で胡魔化してゐた。

シンフォニーとか、ノクターンとか、アレンヂメントとか云つても先づ其內面が崩れなければ音樂沙汰も駄目である。彼の技巧の成算的なのもこの固定した主觀の爲めであらう。

もう私達はエポケーションとか、イジイネスとか、技術の爲めの技術なんて、そんなお目度いことは云つてゐられない。

筆觸とは神經の顫動である、一片の筆觸は全人格を反映する。一枚の畫は一呼吸のもとに動かねばならん。要するにリズムの統一である。

一つの技巧は一枚の畫に盡きる。同一技巧の器械的反復は私達の堪ゆる處でない。所謂日本畫の如何なる傑作も到底私達の氣分と和解することの出來ないのは此點である。

近代の洋畫は最も日本畫に接近して最も日本畫に遠ざかつた。

日本畫の存亡を憂ふるのは愚である、西洋畫や日本畫を何時までも生かさんと思へば先づ繪畫を葬れ。

日本畫のラインはリズムを平面に約してゐるが立面に這入つてゐない。舊式な線のクオリチーなどをよろこんでゐる人は幸福である。

所謂日本畫にはタイムの觀念がない。一定技巧の反復に甘んじてゐられるのもそれが爲めである。

昨日の技巧は今日の技巧でない。今日の私は明日の私でないから。消失と存在、破壞と創造、私は此間に生きて行く。

技巧は拙劣よりも精練を厭ふ。

技術を得んと欲せば技術を破壞せよ。

自然の色は其時と、處と、物とを問はず常にビュアーでフレッシュである。有ゆる物象は絶えざるリズムに顫動してゐる。日光の强烈な時のみ物象が崩れ、色彩が亂れるなどと云ふのはあまりに他愛ない話である。

如何なる方面より自然を解釋するも極點に達すれば必ず同一點に邂逅する。光よりするも、色よりするも、形よりするも。

自然の核心に入る關門は無數に連續してゐる。唯天才のみ其鍵を許される。時代を追ふて此等の門戸は一つ一つ開かれて行く、一度開かれたる關門は其人の絶對所有であつて亦他の侵入を許さない。唯通過を諾す、通過せざれば新なる自己の關門を見出すことが出來ない。

天才は天才の爲めに存在してゐる。彼等は同感すべきものて理解すべきものてはない。妄りに彼等を說明し解釋して凡俗の理解に導かんとするのは寧ろ天才に對して一種の侮辱である。

天才の發見を緩和して技術といふ不純な液體を混じ稀薄な飲料をつくつて顧客に媚びるものを常識畫家といふ。彼等は寫眞を描くにはあまりに悧巧て繪畫を描くにはあまりに愚鈍である。

繪畫も常に極端より極端に推移する。如何なる極端も後より見れば哀れな自然の模寫に過ぎない。

一枚の畫の精髓は其時のパレットとにある。

以上は理窟を捏ねたのではない。私の畫布から得た貧弱な經驗に過ぎない。

有島君の批評を讀んで私はうれしかつた。褒めてくれたからてはない。私の畫の性質をよく見ぬいてくれたからてある。實際私は寫實以外に何んにも知らない。私の畫が所謂印象派といふ形式の皮相な模倣であるか、又寫實の追求より起る餘儀なき過程にあるかは見る人の判斷に委すより仕方がない。私の畫に潤

ひの乏しいのは此冷酷な寫實の爲めであることも自分に解つてゐる。唯第一の變化の時、自然の中に力や生命や輝きを感じて一種のパッションに熱したといふよりは、寧ろ冷靜な寫實の追求は凝結せる技術の破壞を促したからであるといひたい。然し私は今直ぐに土手の畫の樣な二度目の變化には移らない積りである。私には未だ瞬間的氣分を極度まで突詰めて見る餘裕と慾望があるから。

あまり早く不變に移つたので私は何んだか道を誤つて谷へでも辷り落ちた樣な氣がする。

木下君は私の近頃の畫を恰度怒つた啞者の樣に如何にも表現の技巧に乏しいと評されたが、今少し筆觸と動勢に潛む內面の氣分に注意して貰ひたかつた。唯簡單に表現の技巧に乏しいと云つては私によく其意味が通じない。技巧の表現について云爲する前に先づ表現すべき技巧の內容について考へて見る必要がある。色や線や形に對する固定した感覺の形式を絕對のものにされては困る。有ゆる畫的要素の意味は眞の追求と共に絕えず推移して行くからである。御忠告は有難いが氏の所謂理解ある繪畫の約束とは如何なるものを意味するであらうか。もし既成の繪畫より得る普遍的な美の概念ならば、其約束なるものは却つて畫家の直覺力を暗ますものであつて、私の最も厭ふ處である。私は筆を執つた時何等の約束をも豫想しない。寧ろ一切の約束より脫離せんと努めてゐる。たとへ人間の約束には違反しても自然の約束には背かない積りである。

▼主要参考文献一覧

稲垣達郎「山脇信徳」（『早稲田文学』昭17・11）

山本駿次朗『停車場の朝　天才画家山脇信徳の生涯』（三樹書房、昭56）

河村章代「資料紹介　山脇信徳の美校時代日記」（『高知県立美術館研究紀要』平12・3）

鍵岡正謹『山脇信徳　日本のモネと呼ばれた男』（高知新聞社、平14）

＊＊＊

本多秋五『『白樺』派の文学』（講談社、昭29）

紅野敏郎「『白樺』のあけた天窓とそれへの反発」（『講座日本文学の争点5近代編』明治書院、昭44）

匠秀夫『近代日本洋画の展開』（昭森社、昭52）

中村義一『日本近代美術論争史』（求龍堂、昭56）

中村義一『続日本近代美術論争史』（求龍堂、昭57）

北澤憲昭『岸田劉生と大正アヴァンギャルド』（岩波書店、平5）

高階秀爾『日本近代の美意識』（青土社、平5）

五十殿利治『大正期美術展覧会の研究』（中央公論美術出版、平17）

田中淳『太陽と「仁丹」――一九一二年の自画像群・そしてアジアのなかの「仁丹」』（ブリュッケ、平24）

＊＊＊

『『白樺』の世紀展　ロダン、セザンヌ……と大正期美術の作家たち』（西宮市大谷記念美術館、昭56）

『特別展「白樺派と近代美術」』（千葉県立美術館、平1）

『白樺派の愛した美術』（読売新聞大阪本社、平21）